

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



錦ヶ原分教会

昭和59年10月26日 設立
昭和59年11月4日 鎮座祭
昭和59年11月5日 奉告祭

立教189年11月23日(月)午前10時(9時受付)

天理教青年会笠岡分会

青年会長様御臨席総会

～親孝心を、生きる～



立教189年
2月号

おつとめ・式典
感話・抽選会(16時終了予定)

大教会長様お話し、ふしを思索し

芽の出る心定めを
1・20年頭会議において

立教189年大教会年頭会議は、1月20日午後1時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長夫妻・布教所長らが参集した。

大教会長様は、先ず、真柱様年頭のごあいさつを拝読され、教祖年祭の元一日に思いを馳せて、おつとめをつとめる際には、形を揃え、心一つにつとめることが肝心と述べられた。

続いて、「心定め」の重要性を説いて、教祖年祭後の本年の歩み方についての思いを述べられた。引き続き「教会長夫妻並びに布教所長講習会」が開催され、その後、弁当持ち帰り組・会食組に分かれて散会した。

(要旨は次の通り)

立教189年、あけましておめでとうございませう。皆様方におかれましては、日々たす

け、一条の御用のうえに、また教祖140年祭へと向かう年祭活動のうえに、それぞれの持ち場・立場で懸命にお励みくださいまして、誠に苦労さまでございます。

三年千日と仕切つてつとめてきたこの年祭活動も、もういよいよ残すところあとわずか、年祭当日を迎えようとしています。

この時句に思うところをお話したいと思いますが、年頭に当たり、3つのことを皆さんにお願いしたいと考えています。

▼形を揃え、心一つにおつとめ

それに先んじて、真柱様の年頭のごあいさつを承って感じたことをお話しします。

最初に、「ご自身の「癖のようなもの」と仰って、「年祭の年の正月には、明治二十年のいまごろはどうであったかと考えてみる」と述べられました。

私自身はどうかと思ひ返してみると、昨年の年末年始はインフルエンザで寝込んで、元旦は全く表に出てこれませんでした。今年は無事に元気



三年千日を振り返り、本年の歩み方について話される大教会長様

に元旦を迎えられてありがたいなと思つて過ぎしましたが、「年祭の年の正月」というような意識はありませんでした。

そこで、あらためて明治20年当時の様子を思い返そうと『稿本教祖伝』を読みました。

当時の逼迫した差し迫つた様子をあらためて感じ、教祖が25年先の命を縮めてもお急ぎ込みくださったおつとめを、今は誰にはばかることなく勤められることのありがたさに思ひたりました。

そこから「おつとめ」について思いを深めてみると、ある教会のおつとめの様子がいふかびました。——大教会では月次祭前日におつとめ練習をしてから当日を迎えるようにしています。が、前会長様におつとめ練習の芯を

めていただき、私は、その様子を見ながら、おつとめに関していくつか私の思いをお伝えしています。

1つは、おつとめの芯であるおつとめの芯にしっかりとおつとめを合わせること。具体的に言うとおつとめは表拍子と裏拍子の2拍子で勤めますが、「表・裏・表・裏」の表拍子のところが拍子木を打つところ、裏拍子がちゃんぽんを打つところで、その表拍子のところ、拍子木を打つところが、おつとめの止めの位置と一致するようにお願いしています。

——今月、ある教会で月次祭の様子を見てみると、止めのタイミングが非常によく合っていました。芯の方のタイミングがまずバッチリ合っていて、他の5名も芯の止めのタイミングに合っている。その様子を見て、すごく素晴らしいおつとめだなと、半ば感動しました。また、二下り目が始まる前に、おつとめの芯の方が地方の芯の方に「音程がちよつと高い」と声をかけられると、地方の芯の方がとつさに地方の八足の上に置いてあった音叉を鳴らせて音を確認して歌い出されました。バッチリと音程も合っていました。地方の方とおつとめの芯の方がちよつ

と顔を見合わせてうなずき合っている様子を見て、これもまた素晴らしいなと思いました。

年頭のごあいさつからおつとめのことに思いが至り、そして今現在のありがたさと同時に、大教会のおつとめを勤めるときの気持ち・心構えを、今後

も、親神様・教祖によりお喜びいただけるものを目指して勤めたいと、年頭にあたり、教祖の年祭を間近に控えたこのときに思いました。

同時に、大教会のおつとめのあり方を考え直したいとも思いました。教祖が「命の切換するのや」と仰せられるこのおつとめを、より親神様・教祖にお喜びいただけるように、形のうえで手の止めのタイミングや音程が合っていることは大事ですが、その前に、まず勤める者の心を合わせる事が大切だということも、私はいつも言っています。

おさしづに、
心々、心やで、心を受け取るのや
で。
(明治30・7・7)

と仰せくださるその「心」を、より親神様・教祖にお喜びいただける「心」に近づけるために、「形」をしつかりと合わせていくことを通しておつとめ

を勤める我々の「心」をよりひとつにして、より親神様・教祖にお喜びいただけるおつとめにさせてもらいたいと思いました。

▼心定め継続

次に、お話の最後で、

今年、年祭という一つの節目を目指してつとめてきた、その結果が表れてくるのであります。そして、新たな歩み出しにつながる年であります。

喜びも、見えてきた課題もあるでしょうが、これを新たな歩み出しの糧にすることが大切であります。三年千日のいわば非常時から普段の歩みに戻っていきます。しかし、普段に戻るといっても、3年前に戻ってしまったのでは何にもならないと思うのであります。年祭までの歩みが、年祭後、さらに充実した成人の歩みにつながるように、皆さん方にはしっかりと心がけて、それぞれの立場でおつとめいただきたい。

(みちのとも 189年2月号7頁)
と、ごあいさつを締めくくられました。
ここで年祭後の動きとして、笠岡大

教会としてお願いしたいのは、「心定め」ということ。

この度は、「論達第四号」ご発布、大教会の方針と目標を定め、各教会の目標と実践項目を定め、全教会一斉巡教を受け、という流れで年祭活動を進めました。

そのなかで、この度の年祭は、「教祖のひながた」が大きなテーマでした。同時に、全教会一斉巡教で、それぞれに「心定め」をして通ろうと申し合わせて通った3年間でした。

私自身は、「無いことに囚われるのではなく、有ることに意識を向けて、そのなかに喜び・感謝を見つけて通ろう」と心定めして通るなかで、いろいろなことをお見せいただきました。

それらのことは、何を親神様からお知らせいただいているのかを自分なりに思案し、その思案の先に、いただいたメッセージ・親心にお応えする心定めが大切だと気づきました。
おふでさきに、
しやんして心さためてついでい
す多へたのもしみちがあるぞや
とあります。

524
そうして、「いろんな出来事をお見せいただいて、思案して、心を定めて、

このサイクルを何度も何度も繰り返しながら通った3年間でした。

いよいよこの三年千日の年祭活動をつとめ終えるにあたって、その成果、どのように成人できたかは、それぞれかと思えます。素晴らしい御守護をいただいた／素晴らしい成人をさせてもらえたと考える人もいれば、なかなか動くことができなかったと思う方もおられるでしょう。

私自身は、あらためて思い返してみても、自身の実感としては、その成果が素晴らしいものではなかったというのが正直なところですが、「いろんなこととお見せいただいて、思案して、心定めをして」通るなかで、三年千日活動前の自分よりも間違いなく親神様・教祖にお喜びいただける心の成人はさせてもらえているという確かな実感があります。それは、「心定め」の大切さに、あらためて実感を得て、気づかせてもらったことが一番大きなことです。

そのうえから、心の成人を進めていくうえで「心定め」が必要不可欠、なくてはならない大切なものだと捉えて、「心定め継続」と申しました。
継続というと、年祭が終わっても同

じことをと思われる方もおられるかも知れませんが、それもひとつですが、いずれにせよ、心定めは、今の自分自身に何をすればいいかを思索し、それを神様にお誓いした約束・心定めです。年祭活動をつとめ終えるに当たり、1月26日はひとつの節目であって終わりではありません。陽気ぐらしに向かう成人の歩みはまだまだ続いていきます。次の塚へと向かっての歩みがまた始まります。笠岡大教会としては、次の塚は5年後の大教会の140周年記念祭になると思います。

この年祭活動期間に心を定めて始めたことを継続するもよし、また新たな心定めをするもよし、次の塚へ向かって成人の歩みを進めるうえで、今の自分自身が何をするのがいいかを思索して、心定めを継続していただきたい。このことをまず1点目のお話としてお話ししました。

お言葉のなかで、

喜びも、見えてきた課題もあるでしょうが、これを新たな歩み出しの糧にすることが大切でありました。(みちのとも189年2月号7頁) 反省点、すべきことはたくさんあり

ました。なんでこんなことができなかつたのかと自己嫌悪に陥るようなこともありましたが、心を定めて通ることで、間違ひなく成人の歩みを進められる。「普段に戻るといっても、3年前に戻つてしま」うことがないように、年祭活動を終えるにあたって、今の自分が何をすべきか、その心定めをお願いいたします。

▼目的を明確にしたおぢば帰り

2点目、「年祭の年」ということで、笠岡大教会としてはおぢば帰りをお願いしたい。

それも、何のためにおぢばに帰るのか、この目的を明確に持つておぢばにお帰りいただきたい。目的といつても、この人に助かってもらいたい/ご存命の教祖にお会いしに行く/自分自身の癖性分を取つてもらいたい、そんな思いでのおぢば帰りもあるでしょう。それも、何のためにおぢばに帰るのか、このことを明確に心に持つていただきたい。

おさしづに、心々、心やで。心を受け取るのやとあるように、おつとめをする際でも、

おぢばに帰るにあたつても、お受け取りくださるのは我々の「心」です。「目的を明確にしたおぢば帰り」、言い換えれば、どのような心でおぢばに帰るのか、その目的を明確に持つことによつて、その心をお神様・教祖にお喜びいただける心にして、その心でおぢばにお帰りいただきたいということ。これを、今年はお願ひしたい。

▼笠岡挙げての青年会長様御臨席総会

3点目は、今年11月23日に青年会笠岡分会の青年会長様御臨席総会があります。前回は、昭和32年に3代真柱様が青年会長様のときに御臨席総会を開催、参加者800名と大教会年譜表に記録が残っていました。

これは青年会の行事ですが、青年会長・中山大亮様がこの笠岡にお越しくださる総会というところで、「大教会行事」として一手一つに心を合わせてお迎へしたいと考えています。

私が笠岡分会委員長の頃では到底できなかつたことなので、現委員長から御臨席総会をという思いを聞いて、簡単な行事ではない、非常に大変だが、ぜひやってほしいとお願ひしました。真柱継承者として、次代のお道を

担つてくださる方が、この年祭の年に、笠岡にお越しくださいます。

私が青年会本会に入入りしていた頃には、青年会長様がお話しされる様子を拝見するにつけ、直接お話しするにつけ、いつもものすごいエネルギーをもらえる、本当に素晴らしい方だなと感じていました。その方、お道の次代を担われる方が、青年会長として大教会にお越しくださいます。

今年は、まずしっかりとおぢばに運び、おぢばからお越しくださる青年会長様を、笠岡一手一つになつて全力でお迎へしたいということを、3点目としてお願ひしたい。

そのうえで、笠岡大教会として、この11月23日の青年会総会を「大教会行事」として、青年会の行事ではありますので青年会に主体となつて動いてもらいつつ、目が行き届かないところ細かいところはしっかりと動きをサポートしながら、準備・段取りを進めていきたいと考えています。

そのための会議体として、御臨席総会準備委員会(仮称)を作り、そこに青年会の主だったメンバーも入つてもらつて、毎月の大教会の役員部長会とその進捗を共有しつつ進めていきたい

と思っっています。

役員・部長の方は、開催に向けての問題点を指摘する場にしたと考えていますので、それぞれにお考えいただき、ご意見をお聞かせください。

▼ふしを思案し、芽の出る心定め

最後にひとつ、最近の出来事ですが、大教会の12月月次祭前日に、前会様が車で詰所からの帰り道で高速道路を100キロほどで走行中に意識を失い事故に遭われました。車をぶつけただけで、4名乗っていました。怪我などはありませんでした。その知らせを受けて、間違いなく命を救っていただいた、ありがたいと思いました。

その6日後、本部の月次祭で本部員先生(中山慶純先生)の講話を聞いてみると、ご自身が運転中に事故に遭われた話をされました。そのとき、先生は逸話篇の土佐卯之助先生の逸話(88危ないところを)を引用され、ご自身も教祖にお救いいただいたに違いないと思つたと話されました。それを聞いて、これは、私たちにも当てはまる。4名乗っていた車が高速走行中に事故にあつて、命を救っていただいた。その逸話にあつたように、きつとご存命の

教祖がおちばで「オーイ、オーイ。」と扇を開いて呼んでくださっていたに違いない。三年千日をつとめ終えるにあつて、ご存命の教祖が、家族4人

のない命を救ってくださったのだと思ひ、あらためてまた大きな喜びを感じました。

見せられた姿から、何を思案して心を定めるかまでがセットだと気づいていたので、この喜びに対する心定めは今何をさせてもらおうかと思案中です。

皆さんそれぞれに見せられた姿をご思案いただいて、何をさせてもらうか心にお定めいただければと思います。

年祭の年、まず、目前に迫つた1月26日の年祭当日まで、最後までしっかりとつとめきつていただいて、年祭当日を迎えたその後は、次の塚への向かつての新たな心定めを持って、目的を明確にしたおちば帰りの実践、そしてこの1年間をお通りいただきますようにお願ひして、今日の話を終わります。ありがとうございます。

(要約・岡崎真一)

教会長夫妻並びに 布教所長講習会 開催

布教部

布教部(田中隆之部長)は、年頭会議に続き、芳井分教会長夫人・佐藤和代さんを講師に「教会長夫妻並びに布教所長講習会」を開催した。
(要旨は次の通り)

教祖140年祭を目前に控えたこの大切な旬に、私たち夫婦の歩みと、教会・地域で感じてきたことをお伝えしたいと思ひます。

私は山口県宇部市の出身で、大学時代に主人と出会い、第一印象の優しさに惹かれて結婚しました。結婚後もなく、長男が1歳の頃に山口県岩国市で4年間の布教生活を送りましたが、思うような成果は得られず、帰郷後は「私たちに何ができるのか」と夫婦で模索する日々でした。その中で始めたのが学童保育です。

さらに15、16年前、アフリカ・タンザニアを訪れ、子どもたちの輝く瞳に触れたことが転機となりました。「私たちにも何かできるはずだ」と帰国後に里親登録をし、これまで多くの子ども

もたちを受け入れてきました。そして昨年6月にはファミリーホームを開設し、現在6人の子もたちと生活しています。

里子たちと向き合う中で、実子とは違う難しさを痛感しました。彼らは胎内にいる時から安心できない環境で育ち、スタート地点が違うのです。発達特性を持つ子どもも多く、行動が落ち着かず、私自身「なぜ伝わらないのか」「私では育てられないのでは」と悩み、涙したことも一度や二度ではありません。しかし、そんな私の不安をよそに、子どもたちは教会の空気の中で少しずつ成長してくれました。

今の若者は「コスパ」「タイパ」を重視すると言われますが、うちの里子たちは違います。祭典の準備や片付け、日々のお供えのお下げ、私の肩や足が痛いと言えば踏んでくれる。高校生でこんなに優しい子たちはどこにもいないと思うほどです。

ある日、母が体調を崩し、洗い物が溜まっていたところ、立ち寄つた里子が全部洗ってくれました。母は涙ぐんで喜びました。できないことも多い子ですが、10のうち2つが苦手でも、残り8つは穏やかで優しい。その「存在」

と「行動」を分けて見てあげる大切さを、私はやつと学びました。

また、5歳から育ててきた里子が今年成人式を迎えました。お正月には、警察も病院も兎相も受け入れられない中学生が急遽シヨートステイで来ま

した。不安で心を閉ざしていたその子に、成人した里子がそっと寄り添い、自然に心を溶かしていきました。大人では届かない心に、彼の優しさが届いたのです。私たち夫婦だけではできないことを、子どもたちが補ってくれる。これこそ神様から授かった力だと感じています。

以前、義弟が「芳井分教会には宝が埋まっている」と占いで言われたことがあります。当時は意味が分かりませんでした。今思えば、里子たちの秘めた力こそが「宝」なのだと感じます。どの教会にも、すぐには見えない宝が埋まっているのかもしれない。地域との関わりも大切にしてきました。コロナ禍でお年寄りが孤独になつていく姿を見て、週1回のお弁当作りを始め、地域行事にも積極的に参加し



日まぐるしくも実り多い
日常活動について話す
佐藤さん

ました。また「ポレポレ」と名付けた土地と山を購入し、ヤギを飼いながら地域の拠点づくりを進めています。お寺の奥さんや他宗教の方々も手伝いに来てくださり、宗教の垣根を越えた交流が生まれました。

ある時、彼女たちに「日々のお勤めはどうしているの?」と尋ねると、「和尚が勝手にしている」「主人だけが早起している」との返事。天理教のようにならぬ家族でお勤めする文化は珍しいのだと気づき、改めて教会のありがたさを感じました。

そのご縁で、お寺の和尚さんの集まりで講話を頼まれ、子ども食堂や布教の経験が話されました。宗教は違っても「地域で何ができるか」「現代の駆け込み寺としてどうあるべきか」という悩みは共通であり、手を取り合っ

人に寄り添うことこそ、に、を、い、が、け、の、一つの形だと確信しました。

結婚して30年。かつて「何があつてもついていく」と言った主人とも、今は一日に一度話せば良いほど忙しい毎日です。教会の奥さんとしても母としても完璧ではありませんが、目の前の6人の子どもたちと本気で向き合っている、地域のおばちゃんたちと笑い合う今の自分の姿が、ようやく自分らしい形になってきたと感じています。

アフリカにいる長男が「里子たちがいてくれてよかった。頑張りすぎんように」と言ってくれました。私たちの歩みを一番近くで見えてきた子の言葉に、胸が熱くなりました。

里子たちから教わったのは、「存在そのものがあるがたい」という真実です。世間では評価されないかもしれない子どもたちが、おばあちゃんの茶碗を洗い、不安な子に寄り添う。その優しさこそ、成人の姿だと思います。

1月26日の年祭では、「地域でこんなに笑って過ごしてきました。こんな素敵な子どもたちが育っています」と胸を張って教祖にご報告したいと思っ

い、評価されない子がここでは褒められる、そんな優しさの空間をつくっていきたく願っています。

本日は最後まで温かくお聞きくださり、ありがとうございました。
(要約:佐藤真孝)

春季大祭講話

新たな歩み出しに

つながる年の歩み方

大教会長様

立教189年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら参拝のもと執り行われた。

祭典に引き続き、大教会長様は、春季大祭のと教祖年祭の意義に触れ、三年千日祭活動の成果を話されつつ、前日に引き続き、本年の歩み方について思いを述べられた。最後に、見えてきた課題を思索して思召に応える心定めを促された。
(講話要旨は次の通り)

▼春季大祭のと教祖年祭の意義

まず最初に、春の大祭の意義・意味合い、また教祖の年祭の意義について確認をおきたいと思えます。

春の大祭は、明治20年陰暦正月26日に教祖が子ども可愛い一条の親心から25年先の定命を縮めて世界だすけに出られた、その親心に応える成人の歩みを祈念して勤められるのが春の大祭であり、この元一日に込められた親の思いに立ち返ることが、春の大祭の意義・意味合いかと思えます。

そして、「諭達第四号」に、
教祖の親心にお応えすべく、よぶ、
ぼく一人ひとりが教祖の道具衆として
の自覚を高め、仕切って成人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である。
と記されるように、まさしく我々お互いは三年千日と仕切って、この年祭活動をつとめてまいりました。

この度の年祭活動は「諭達第四号」をご発布いただき、大教会の方針と目標を定め、各教会の目標と実践項目を決め、全教会一斉巡教を受け、そういう流れで進めてきました。



本年の歩み方について
話される大教会長様

年祭活動後半に入って、「毎日、喜び・感謝を声に出そう」という実践項目も大教会として打ち出しました。
この年祭活動では、特に大きなテーマとして「教祖のひながた」がありました。

▼心定めの継続

そしてもう1つ、全教会一斉巡教での申し合わせとして、それぞれに心定めを通して通ることも重要でした。

私自身も心定めをして、この年祭活動期間通りました。そうして通るなかで、あらためて陽気ぐらしに向かつて心の成人を進めていくうえで、「心定め」が非常に大切だと実感しました。
心定めというのは、親神様・教祖の思召にお応えするには、今の自分自身が何をしたらいいのかを思案して決

め、そのことを神様にお誓いする約束です。

そこで、今日お願いしたいことの1つは、三年千日と仕切って、教祖140年祭に向けて続けたこの「心定め」、これを継続していただきたい。

「心定めの継続」というと、三年千日と仕切った心定めをそのまま続けることにもなりますが、それだけではありません。

年祭後も、陽気ぐらしへ向かう心の成人の歩みは続いていきます。そのうえから、年祭当日をつとめ終えたその日から、次の塚、笠岡大教会としては5年後の創立140周年記念祭、それに向かつて、あらためて心定めをしていただきたいということです。

今回の年祭活動では、それぞれにいろいろな内容で心定めをされたかと思えます。私が聞かせてもらったものでは、「毎日教祖にお茶をお供えさせてもらう／三年千日をこういう心で通らせてもらう／路傍講演を千回する」といった心定めをされた方もおられました。内容は様々ですが、いずれも、親神様・教祖にお受け取りいただき、お喜びいただくために何をするかを、それぞれ考えられたと思えます。

私自身は、この三年千日、まず自分の心の在り方、物事の見方・考え方というところで、「無いものに因られるのではなく、有ることに意識を向けて、そのなかに喜び・感謝を見つけて通ろう」と心に定めて通り、そのなかでいろいろなことを見せいただきまし

た。

おふでさきに、
め／のみのうちよりもしやんして

心さだめて神にもたれよ 四 43

しやんして心さだめてついでい 五 24

すゑはたのもしみちがあるぞや 五 24

とあります。

心定めをして通るなかで、見せられたこと、例えば、自分の身の回りに起こってくることで、身の周りの人に起こってくることで、自分自身の身上に見せられること、自分の家族に見せられること、それらの出来事を通して、神様は私に何を仰っているのか、どんなメッセージをくださっているのか、そのことを、そのつど思案し、思案して気づいたお知らせ・メッセージに相應するには何をすべきか、それを新たな心定めとしてする。
私は、この三年千日、「お見せいただく、思案する、そして心を定める」、

これをずっと繰り返してきました。いろいろと思索し、心定めしました。約束通りできたものもあれば、まあまあできたもの・全然できなかったものもありましたが、できにしろできなかったにしろ、この「心定め」を通して、3年間、親神様・教祖の思召にお応えできる自分に、少しずつ変わった、心が成人できたと、私は強く実感しています。

私自身は、今、継続している3つの心定めを、年祭後も続けたいと思っています。

1つは、息子の指の身上を通して、毎夕づと最後に家族揃ってお願いづとめとおさづけの取次をすること。

2つ目は、身の回の方の身上を通して、夫婦・家族で神名流しとゴミ拾いをする事。

3つ目は、大教会の実践項目として打ち出した「毎日、喜び・感謝を声に出そう」。今まさに成長過程にある自分の子供たちや周りの方々に、「ありがたいな、嬉しいな、結構だね」と、信仰を通して感じる喜び・感謝の声を、自分自身が声に出すことによって、その感謝・喜びを伝えていきたいと思えます。

これら3つの心定めを、年祭後も継続して実践実行していきたいと思っています。

年祭活動期間だからこそできた心定めもあるでしょう。いずれにせよ、もう目前となった教祖年祭を迎える1月26日には、次の塚へ向かう心定めをして歩み出していたできますようお願いいたします。

▼目的を明確にしたおちば帰り

次に2つ目。今年1年の歩みということについて。今年は「年祭の年」ということで、笠岡大教会としては、「おちば帰り」、この年祭の年に、おちばを賑やかにさせていきたい。

年祭の当日以外にもおちばに足を運ぶ、1回でも多くおちば帰りを実践・実行していただきたいと思いますが、ただおちばに帰ってほしいのではありません。

昨年10月の本部青年会総会の席上で、真柱様は、

本部という理あって他に教会の理同じ息一つのもの。この一つの心治めにや天が働き出来ん

(明治39・12・13)

というおさしづを引かれたうで、

ちばと教会との関係は切っても切れない結びつきがあり、ちばの理を頂いてこそ、教会は真にその役目を果たすことができるのです。

(みちのとも 188年12月号11頁)

と話されました。

おちばに帰るに当たって、今年は、何のためにおちばに帰るのか、その「目的」を、一回一回しっかりと自分自身で持って、おちばにお帰りいただきたい。「目的」を明確に(自覚)しておちばに帰ることによって、おちばの理を頂ける、教会が真にその役目を果たすことができると思います。

例えば「この人に助かってもらい／ご存命の教祖にお会いしに行く／自分自身を救っていただきたい」…様々あると思いますが、何のためにおちばに帰るのか、そのことをご自身にしっかり持っていただきたい。

言い換えれば、どんな心でおちばに帰るのかということ。おさしづに、心々、心やで。心を受け取るのやで。

(明治30・7・7)

とあります。

どんな心でおちばに帰れば、親神様・教祖にお喜びいただけ、ちばの理を頂戴できるか、そのことを思索し、この

1年、目的をしっかりと持ったおちば帰りを実践・実行していただいて、この年祭の年におちばを賑やかにしていただきたい。

▼笠岡挙げての青年会長様御臨席総会

次に3つ目。今年の11月23日は青年会笠岡分会総会があります。この度の総会は青年会長・中山大亮様にご臨席いただいていたの総会です。

一昨年9月9日に、現笠岡分会委員長さんから「立教189年に青年会長様ご臨席の総会を開催したい」と話がありました。それを聞いて、大変なことだと思いましたが、その大変なことをしたいと言ってくれたその心が、まず何とも嬉しく、「ありがたい。是非やってほしい」と応えました。

私も、23歳からおちばで伏せ込み中に、直接、青年会長様と接する機会があり、また、笠岡分会委員長・青年会本部の部員として接するなかで、青年会総会でお話を聞いたり、部員としてひのきしん隊入隊中にお酒を飲み交わしながらお話ししたりして、不思議な力、何とも言えない温かさで、毎回、元気になる自分を感じていました。それを皆さんにも少しでも知っても

らいたくもあり、この御臨席総会、間違ひなく、青年会員だけでなく、この笠岡大教会につながる皆の大きな喜び、これからの成人の歩みに大きな意味合いがあると私は信じます。

真柱継承者であり、次代のお道を引つ張っていただく大亮様が、青年会長として、今、この旬に、笠岡にお越しくださいます。

そういうことで、この青年会総会は青年会の行事ではありませんが、「大教会行事」として、笠岡一手一つとなつて、一丸となつて、この行事に向かつての準備・歩みを進めていきたいと思ひます。このことを3点目としてお願ひしたい。

それに向かつての準備・段取りや当日のひのきしんなど、また、当日の動員もお願ひいたします。

1年間しっかりとおちばに足を運んでおちばの理を頂戴し、おちばからお越しくださる大亮様をお迎えしましょう。

▼ふしを思索し、芽の出る心定めを

最後に、最近あった出来事をお話しします。

先月12月20日大教会の月次祭前日、

詰所主任をお務めくださっている前会長様ご夫妻と妹2人が、大教会に向けて車で帰ってきていました。高速道路を100キロほどで運転中に前会長様が意識を失つて、車をぶつけるという事故に遭われましたが、車をぶつけただけで済んで、乗っていた4人も特に怪我などすることなく大教会には無事に帰つてられました。それを聞いて、命を救っていただいた、ありがたいなと思ひました。

その6日後、12月26日の御本部の祭典で本部員先生の講話のなかで、ご自身が車を運転中に事故に遭われたことを話され、次の逸話篇を引用されました。

88. 危ないところを(本文割愛) という逸話を引かれ、その先生も教祖に救っていただいたと話されました。

それを聞いて、これは私たちにも当てはまると思ひました。12月20日の父と母と妹2人の乗っていた車の事故。命を救っていただいていた車とは思つていましたが、誰が救ってくれたのか。きつとご存命の教祖が「オーイ、オーイ。」とお呼びくださったに違ひない、ご存命の教祖が救ってくださいたんだと、あらためて本当に

心からありがたいと思ひました。思い返せば、10年前。教祖130年祭を勤め終えたその翌月に、そのとき会長だった父が脳出血の身上をいただいて倒れました。その時の心定めで、私は今この場に会長としているのだと思ひます。

この度は年祭活動をつとめ終えるに当り、ご存命の教祖に家族4人のない命を救っていただいた。ありがたい。この見せられた姿に対して、どんな心定めをすればよいのかは今現在思案中です。

土佐先生の逸話も、最後に「心を定めた」とあります。先人先生方の歩みにおいても、やはり心の成人のうえでは「心定め」は欠かせないものだったのだなと思ひました。

おさしづに、定めも定めんも定めてから治まる。治めてから定まるやない。…定めて掛かつて神一条の道という。(明治24・11・3)とあります。

真柱様は年頭に当たり、

今年、年祭という一つの節目を目指してつとめてきた、その結果

が表れてくるのであります。そして、新たな歩み出しにつながる年であります。

喜びも、見えてきた課題もあるでしょうが、これを新たな歩み出しの糧にすることが大切であります。(みちのとも189年2月号7頁)と話されました。

まず、年祭当日まで残りわずか、しっかりと歩みきる、つとめきると同時に、次なる塚に向かつての新たな心定めを——この度の年祭活動を振り返つて、今の自分自身いろんな喜びと課題が見えてきたかと思ひます、それを踏まえて、今の自分自身が親神様・教祖の心にお応えするには、思召にお応えするには、何をしたらよいかを考え——心を定めて、そして、何のために、おちばに帰るのか、目的をしっかりと持ったおちば帰りを、1年間つとめ、11月23日には青年会長様をお迎えし、青年会総会を開催させていただいて、この1年間の歩みをそのように進めさせていただきたい。

最後にあらためてお願いをさせていただきます。今日私の話を終わります。ご清聴ありがとうございます。

(要約：岡崎真一)

教祖百四十年祭
帰参者の集い
盛大に開催
年祭準備委員会

笠岡大教会教祖140年祭準備委員会は、1月25日、詰所3階講堂にて、「教祖百四十年祭帰参者の集い」を開催した。この集いは、同じ笠岡につながる教友同士が、三年千日の年祭活動を分かち合い、嬉しい勇んだ気持ちで140年祭当日を向かえる事を目的に開催され、およそ250人が集った。

第1部感話の部では、大教会長様の挨拶に続き、塩出陵介さん(葦陽分教



塩出陵介さん



村川陽子さん



模擬店メニューを食べながら語らう



どの店も大盛況

会)と村川陽子さん(大江橋分教会)の2人が演台に立った。塩出さんは、おちばでの修養科生活を通して感じた御守護や、自身の心の変化、これからの目標を語った。村川さんは、布教の家庭庫寮での様々な出来事や心の葛藤、教祖を感じたエピソードなどを交えて、感話をした。

会場の聴衆は、若い2人が語る一言一言に心から聴き入った。

第2部模擬店の部では、各教会や青年会などが、おでん・イカそうめん・合鴨コース・焼き鳥・スイーツ・飲み物などを出店した。どの店も完売となり、集った人々は、年祭前日に、楽しくあ



大勢の教友が感話に聴き入った



大教会長様と村川陽子さんによる、歌とフルート

たたかい雰囲気ですらう事ができた。

(年祭準備委員会 上原繁次)

**第2回「伏せ込み
ひのきしん」実施**

青年会

青年会笠岡分会(瀬藤大喜)は、青年会長様御臨席総会に向けて、伏せ込みひのきしんをつとめさせていただきました。

第2回目となる今回は、教祖140年祭の折に宿泊で使用された布団を干すひのきしんに取り組みました。晴天のもと、青年会員が声を掛け合いながら手際よく作業を進め、終始明るい雰囲気をつとめさせていただきました。



当日は現地からも青年会員の参加があり、若い世代の元気な動きと前向きな姿勢が随所に見られました。布団を運ぶ姿や笑顔で取り組み様子から、活気あふれる時間となりました。
総会に向けて、青年の力が集まる理りのひのきしんとなりました。
ありがとうございました。
(委員 山野大地)

立教百八十九年 春季大祭 祭典役割表

講 話		祭 主		指 図 方		賛 者			
大教会長様		今川昌彦	中島誠治	上原繁道	上原繁次	佐藤真孝	佐藤真孝		
役 割	区 分	座りづとめ						前 半	後 半
地 方		佐藤道孝	中村道徳	上原志郎	今川昌彦	浅野明教	谷内秀自	田中隆之	
おつとめ	てをどり	大教会長様	前会長様	上原繁道	前奥奥様	大教会奥様	前奥奥様	大教会奥様	
笛	ちゃんぽん	佐藤真孝	岡崎真一	中島誠次	高木昭祥	山中剛史	田中つかさ	吉岡八恵	
拍子木	吉岡壽	横山逸郎	山田敏教	岡田治喜	内海史郎	岡崎史郎	赤木素志	虫明立生	
太鼓	内海史郎	杉原善朗	岡崎治喜	内海史郎	岡崎史郎	岡崎史郎	赤木素志	虫明立生	
すりかね	中村剛	虫明立生	赤木素志	赤木素志	赤木素志	赤木素志	赤木素志	赤木素志	
小鼓	虫明立生	赤木素志							
琴	上原順子	三島照美	門脇加津	門脇加津	門脇加津	門脇加津	門脇加津	門脇加津	
三味線	武内正美	横山小智榮	室悦子	室悦子	室悦子	室悦子	室悦子	室悦子	
胡弓	内海安子	高木孝子	上原千枝子	上原千枝子	上原千枝子	上原千枝子	上原千枝子	上原千枝子	

三月講話 学生層育成者講習会

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいませ

親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には一れつこどもが陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思召され 紋型ないところからこの世と人間をお創造下されたばかりではなく 約束された年限の到来を待ち 教祖を月日のやしろとしてこの世の表にお現われ下さり 万いさいの真実を明かして陽気ぐらしへの道をお教え下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございませ

私共は身上事情を通してこの道にお引き寄せ頂き 〴〵恩報じを思い念じて日々は朝夕に御礼申し上げつ つたすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております

その中にもこの月は 教祖が明治二十年陰曆正月二十六日人々の成人を促す上から二十五年先の定命を縮めて現身をお隠しになられ 世界ろくぢに踏み均しに出られた尊い月にあたり おぢばでは教祖百四十年祭が執り行われますので 当教会でも理のお許しを戴いて只今より立教百八十九年の春季大祭を執り行わせて頂きます おつとめ奉仕人一同 親の思いを胸にたすけ心も一入に明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりを つとめさせて頂きます 御前には寒さ厳しき中をも厭わず 遠近を問わず寄り集いました道のこども達が相共にお歌を唱和し同じ思いに伏し拝む状を御覧下さいませ 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて教祖百四十年祭が目前に迫って参りました 前晩には詰所にて帰参者の集いを開催しお互いにこの年祭活動を称え合い より喜びに溢れた年祭当日を迎えさせて頂きたいと存じます また本年は年祭の年として 次の塚へ向かっての心を定めた上で 目的を明確にしたおぢばがえりの実践を通して 成人の歩みを進めさせて頂く所存でございませ

何卒親神様には 教祖年祭を新たな心の成人の始まりとして たすけ一条に励む皆の誠真実の心をお受け取り下さいませ 万たすけの上にも尚も自由のご守護を賜り お望み下さる神人和楽の陽気づくめの世の状に一日も早く立て替わりますようお願い申し上げます 一同と共に慎んでお願い申し上げます

春季大祭 教祖祭文

御存命の教祖の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

教祖には魂のいんねんにより月日のやしろとお定まり下されてより 永の歲月筆にも口にもつくせぬご苦勞の中を もいそいそとお通り下されて ひながたの道をお遣し頂いたばかりでなく 子供可愛い一条から定命までもお縮めになり 今も尚存命のまま一れつ子供の成人をお導き下さる 親心の程は 言葉を尽くしても御礼申し上げることはできません

私共はただただこのご厚恩にお応えしたいと日夜ひながたを仰ぎ 百四十年祭を目指して一手一つに努めて参りましたが 温かき親心のまにまにお連れ通り頂き 恙なく御年祭の年を迎えさせて頂き 誠に有り難く勿体ない極みでございませ

つきましてはぢばの理を受けて 当教会においても今日の縁ある日に大祭を執り行い 改めて教祖の御前に参り出て 教え子達と相共にご苦勞の道すがらをお偲び申し上げます と共に 教祖の道具衆としてお使い頂く喜びを胸に湛えて 心勇んで新たな成人の道への門出をお誓い申し上げます

何卒この心定めをお受け取り下さいませ 新しい芽生えの道をお見せ下さると共に 日一日と成人の道をお連れ通り下さいますようお願い申し上げます 一同と共に慎んでお願い申し上げます

大教会だより

◎教人資格講習会修了者

立教189年2月15日終講
出雲川津 仙田幸次

◎教祖140年祭詰所受入ひのきしん

自 立教189年1月25日
至 立教189年1月26日

・東ブロック

明石市 杉原美津枝

・西ブロック

ひろさと 浅野明教

・福山ブロック

福山 酒井實

・高屋ブロック

芦品 青木茂男

・島根ブロック

多古浦 余村元

・上府ブロック

府中市 奥忠郎

上川邊 友井正人

◎教祖140年祭詰所片付けひのきしん

自 立教189年1月27日
至 立教189年1月28日

・東ブロック

明石市 杉原美津枝

・西ブロック

ひろさと 浅野明教

・福山ブロック

福山 酒井實

・高屋ブロック

芦品 青木茂男

・島根ブロック

照雲 雑賀元生

・上府ブロック

木津和 丸山隼人

府中市 奥忠郎



1月26日、教祖140年祭が午前10時30分からご本部で執行された。当日私は前会長である母親と2人で自教会を午前4時半に出発しておちばに向かった。全国的に大寒波の予報が出されていた事に備えて冬用タイヤを装着し、渋滞を避けるためと駐車場確保のための早出だった。午前7時30分頃には渋滞も雪道もなく無事天理に到着し、市内は朝づとめから帰る人も多くいた。先に燃料補給をしてから西礼拝場の駐

車場に入り、それから1人で南礼拝場で帰参挨拶のおつとめをつとめた。殿内は年祭当日にしては少し寂しい気もしたが、既に毛布を敷いて待機する人も少なからずいた。祭典の始まりまでの時間に買い物を買った後、10時前に持参した車椅子を出して母親と神殿に向かった。殿内は車椅子のスペースはいっぱいと事で境内掛に案内された西礼拝場地下へと向かい、参拝場所を確保してから大阪の教会に嫁いで行った妹夫婦と合流して真柱様のお話が終わるまで一緒に参拝した。「今年1年を年祭の年としておちばを賑やかに」との声に、この日教祖140年祭に参拝出来なかった自教会の信者の方々と日を替えておちばがえりを予定しており、大教会長様の仰せになる「目的を持つての帰参」となる様、しっかりと声掛けをして教祖にお喜び頂きたいと思う。(む)

詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

- ・詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、2日前までには、必ず詰所へご連絡ください。
- ・食事をしない(宿泊のみの)場合でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

天理教青年会

立教百八十九年 基本方針

心を澄ます毎日を。

僕たちは、今日という日をどう生きるのか。
多様化し、情報あふれる社会の中で、
知らぬ間に流されてしまう未熟さが、
僕たちにはある。
だからこそ、教えに立ち返る。
起こってくることの中に、をやの思いを探しながら、
教えに自らを合わせていく。
僕たちは、今日を「神一条」に生きたい。

僕たちは、今日という日をどう生きるのか。
世界に目を向けたとき、
身上に悩み、事情に苦しむきょうだいがいる。
だからこそ、問い続ける。
いま、僕たちに何ができるのか。
手を差し伸べ、寄り添う。
御守護を願うとともに、をやの思いを伝える。
僕たちは、今日を「たすけ一条」に生きたい。

僕たちは、今日もおちばに心をつなぎ、
仲間と共に世界たすけの歩みを進める。

行く手は、世界。
追風は、^{おいて}親神様、教祖。

僕たちは生きる、心を澄ます毎日を。

活動目標

- 一人が一人のおたすけ相手を
- 教えに触れる機会をつくる
- ひのきしんの実践

重点項目

第100回天理教青年会総会への会員結集

第100回天理教青年会総会の式典は、10月27日(火)午前10時より本部中庭にて執り行います。
前日の10月26日(月)には、前夜祭の開催を予定しております。

11月23日(月・祝)には、笠岡分会「青年会長様御臨席総会」が「大教会行事」として開催されます。
笠岡一手一つに、一丸となつてつとめさせていただきます。